

「東アジアキリスト教交流史研究会」が始まりました

(『むくげ通信』257号、2013.3.24、17～18頁)

飛田雄一



2013.1.25 神戸学生青年センター

この研究会は以前、青丘文庫で韓哲曦さん、蔵田雅彦さんを中心に開かれていた「日韓在日キリスト教史研究会」を母体のひとつにしている。この研究会には、信長正義、飛田も参加していた。1995年には、韓国基督教歴史研究所『韓国キリスト教の受難と抵抗』（新教出版社）の翻訳・出版なども行っている。青丘文庫では、1979年から在日朝鮮人運動史研究会関西部会、1981年から朝鮮民族運動史研究会（のちに朝鮮近現代史研究会の改称）がそれぞれ月1回開催されていたが、あるときは、このキリスト教史研究会とあわせて重なるメンバーは月3回も青丘文庫に通っていた時期があるのだ。あまりにもやりすぎ？で、後にキリスト教史研究会は休止となり、在日、近現代の研究会も同じ日（原則的に毎月第2日曜の13:00～17:00）に開催することになった。負担も軽減され懇親会も1回減って健康のためには望ましいことだった。

今回発足した「東アジアキリスト教交流史研究会」（以後、「交流史研」とする）は、研究対象を日韓在日のキリスト教史から広げて、「東アジア」としたものだ。呼びかけ文には以下ようにある。

「東アジア地域には近代以前にも、何度かキリスト教伝来の契機がありました。そして、19世紀には、東アジア地域にプロテスタントの伝道活動も本格的に開始されました。この地域における国民国家の形成期であるこの時代、欧米列強による帝国主義的な東アジア門戸開放の衝撃とともにもたらされたキリスト教は、近代化の原動力ともなりました。／その後、日本による朝鮮半島や大陸への帝国主義的進出が開始されました。こうした事実に着目し、日本のキリスト教が現地の教会や地域社会への伝道を通して、国家を超えて、侵略や植民地支配にどう関わってきたかについての

研究がなされるようになりました。／また、近年では、東アジア各地域のキリスト教史に取り組む研究者も多くなっています。この研究の広がりや深まりは、単一の国家や地域内での教会形成や伝道の枠を超えて交流する信徒や伝道者の存在を浮き彫りにしてきました。このような研究者の問題意識は、東アジア地域のキリスト教を取りまく今日的な問題群に刺激を受けたものでもあります。その今日的な問題とは、植民地主義の残滓やグローバリズムの弊害、非キリスト教諸国の台頭とキリスト教諸国との摩擦などです。／これらをふまえた上で、同じ儒教文化圏にあり、仏教や在来の伝統宗教の広がりという共通の宗教基盤を持つ東アジア地域でのキリスト教を、国家の枠を超えて交流史的視点から捉え直すことを目的にして、「東アジアキリスト教交流史研究会」の構想が生まれました。」



呼びかけ人は、李省展(恵泉女学園大学、会長、写真左)、徐正敏(明治学院大学)、渡辺祐子(同左)、大西晴樹(同左)、辻直人(北陸学院大学)、香山洋人(日本聖公会司祭)、高井へー由紀(恵泉女学園大学)、原誠(同志社大学)、一色哲(甲子園大学)、飛田雄一(神戸学生青年センター)、後藤 聡(日本基督教団牧師)、信長正義(日本基督教団信徒)、李相勁(韓国基督教会館)、洪伊杓(基督教大韓監理会牧師)、神山美奈子(日本基督教団牧師)の15名。

『キリスト教交流史』とは、第一に、東アジア諸国家・諸地域での信仰共同体の形成や信徒・伝道者の交流の歴史的探究を指します。従来から研究の蓄積がある教派・教団史を歴史の縦軸とすると、交流史では、それに加えて、一つの地域でのさまざまな集団・勢力を横断的に分析し、自律的な地域形成のなかでのキリスト教の働きや役割に注目します。また、移民や植民など、地域を起点として国家を超えて交流する信徒や伝道者の動態に関心をもち、そのような交流を経験して変化するそれぞれの国家・地域でのキリスト教を研究の対象とする研究も、キリスト教交流史の研究対象になりうるでしょう。／また、このような地域でのキリスト教の交流史の実態と特徴を明らかにするためには、歴史学や思想史、民俗学や文化人類学、社会学、政治学などの手法も採りいれながらそれぞれに適合的な方法論を構築しなければなりません。キリスト教交流史の第二の含意は、こうした隣接諸科学との学的交流や調査・研究の方法論の受容と方法論の構築です。

／本研究会では、こうした試みを実現するために、キリスト教史学会だけではなく、宗教を対象とする学会の横断的な「交流」を目ざしています。「日韓キリスト教史研究会」など伝統ある研究会が残した研究遺産を継承し、対象地域での同様の学会・研究会とも積極的に意見を交換し、ともに研究を深化させればと考えています。これが、キリスト教交流史研究の第三の意義です。」（同呼びかけ文より）



この交流史研究会の第1回ワークショップが、本年1月25日～26日、神戸学生青年センターで開催された。当初、10名強ぐらいの会ができればと思っていたが、参加者は31名、初めての出会いも多い充実したワークショップとなった。

発表は、以下のとおり。いずれも新鮮で、討論も活発だった。

1. 一色 哲「近代における日本人の越境とキリスト者の動態」
2. 藤野陽平「台湾のキリスト教徒にみる親日感情とその構造 ―キリスト教主義と台湾独立志向との関連から―」
3. 倉田明子「中国初期プロテスタント布教と東アジア」
4. 洪 伊杓「韓国プロテスタント・キリスト教史の研究傾向考察 ―諸史観の比較分析を中心に―」

1日目が終了すると、やはり懇親会だ。最近むくげの会も御用達の洋風居酒屋「びーあん」で開催。これも盛り上がった。となりの大学生のグループを凌駕？していた。



「びーあん」で、かんぱーい！

2日目の総合討論が終了ののちフィールドワークに出かけた。案内はわたくし。最近のフィールドワークは、バスを貸し切ること多い。友人のキリスト教式葬儀屋さん経由で申し込むが、時間単位で申し込むことができ、一般のバス会社より割安だ。

コースは、連合国軍捕虜跡、外国人墓地だ。連合国軍捕虜病院は、アジア・太平洋戦争の時期に日本軍が神戸中央神学校を接收して作ったもので、神戸市文書館（旧南蛮美術館）の南にある。現在はマンションとなっており小さな公園の一角に石碑が残っている。この神学校は賀川豊彦が卒業したことがよく知られて

いるが、韓国ではこの神学校の卒業生の多くが神社参拝に抗議して弾圧を受けたことでも有名だ。

そして、外国人墓地だ。神戸市立のこの墓地は再度山公園にあり、ステキはところだ。この公園は神戸市内の小中学生は必ず遠足に行くところで、中心の池は以前六甲山と貫くトンネル工事で水が抜けてしまったことがあるが、現在は護岸工事？もなされ、ボートも利用できる。センター朝鮮語講座で、キムチ鍋ハイキングにもよく出かけていた。

外国人墓地には、朝鮮ゆかりの2名宣教師、W.B. スクラントンとL.L. ヤングが眠っている。外国人墓地でももっとも古い墓石のある区画にある。スクラントンは、朝鮮で「はだしの医師」的に働いた方、ヤングは、在日朝鮮教会の「生みの親」的な方だ。スクラントンの墓地は、徐正敏さんの依頼を受けて飛田が初めて？確認したもので、韓国では飛田が第1発見者として知られている？。



フィールドワークを終えて、ビナスブリッジ

終始、好天に恵まれたフィールドワーク。最後は、市内を望む諏訪山のビナスブリッジで、記念写真をした。多くの観光客が訪れるところで、なんのまじないか、南京錠がたくさんぶらさがっている。われわれは再会を誓ったが、南京錠はつけなかった。



第2回のワークショップは、今年7月26日～27日、東京・在日本韓国YMCAで開催される。

本ワークショップの前に、昨年10月29日、恵泉女学園大学キリスト教文化研究所の主催でシンポジウム「東アジアキリスト教交流の未来への展望」が開かれた。このシンポジウムが交流史研の方向性をしめすもので、『福音と世界』2013.3月号に、特集「交流する東アジアのキリスト教」として、以下の論文が収録されている。ご参照いただきたい。

1. 李省展「交流する東アジア」
2. 徐正敏「韓国キリスト教史研究とアジア的観点」
3. 一色哲「交流史の結節点としての《琉球＝沖縄」と日本キリスト教史再考」
4. 渡辺祐子「中国キリスト教史研究から見る東アジアキリスト教交流の可能性」
5. 原誠「キリスト教という種と東アジアという土壌——各発表へのコメント」